

## 島木赤彦と関東震災

宮 川 康 雄

### 一

大正十二年九月一日は、二百十日の前日に当たっていた。早朝しばらく降雨があつたが、午前十時頃に晴れ、暑い日になった。昼近く、午前十一時五十八分四十四秒、関東地方の南部一円に大地震が発生した。関東大震災の発端となった地震である。震源は相模湾沖の海底で、震度は東京でマグニチュード七・九、地震による死者、行方不明者は、東京府と神奈川、千葉、埼玉、静岡、山梨、茨城の六県を合わせて、約九万五千人、家屋の半壊以上、約五十五万戸、焼失約三十八万戸、罹災者は三百四十万人に上った。

被害は東京、横浜において最も大きく、災害は家屋の倒壊や崖崩れによるものもとよりとして、昼食時で火を用いていた家庭の多かったことが災いとなり、各所に発生した火災により拡大した。東京では市内百数十箇所で起こった火災が九月三日の午前まで続き、当時の市域の七〇パーセントが焼失した。このため、江戸時代以来の下町の町並みは姿を消した。

帝都東京を壊滅の淵に立たせた関東大震災は、このようにして過去の日本において前例のない大きな影響を各方面に及ぼすことになった。

関東震災が起こったのは、島木赤彦の没前三年である。この災厄

の時に逢着して赤彦がいかに対応したか、また、震災に遭遇したことは、赤彦にいかなる影響を及ぼしたのか、本稿ではこのことについて考察してみたい。

### 二

地震が発生した時、赤彦は長野県内の東筑摩郡洗馬小学校において万葉集の講義中であつた。

『アララギ』の発行所は、当時東京市外（豊多摩郡代々幡町）代々木山谷に置かれていたが、発行所には藤沢古実がいて留守を守り、赤彦自身は月に一度上京、数日間滞在して『アララギ』の編輯と発行、会員との面会・指導に当たるほかは、おおかた諏訪の自宅にあつた。郷里に帰住して数年、県内各地の教育界から歌会と万葉集の講義に招かれることも日常の仕事になっていた。

赤彦はこの年、太田水穂、北原白秋、前田夕暮など他派の歌人と厳しく対立していた。『アララギ』の二月号に「水穂白秋二氏の歌」、三月号に「白秋氏の歌ども」「水穂氏の歌を評す」、四月号に「太田水穂氏の詞」、五月号に「前田夕暮氏に質す」などを精力的に連続執筆し、強い態度をもって他派に臨んでいる。

一方、この頃は、石原純、釈迢空など有力な歌人が『アララギ』を離れ、古参の同人も作品を発表することが少なくなっていた。その上、古泉千樞が惹き起こした不祥事を抱えて、赤彦は内心ではひ

とり懊悩していたのである。<sup>(1)</sup>千慳は一月号の『アララギ』に発表したあとは作品も寄せなくなり、いよいよ疎隔の度を加えていた。

赤彦は八月十二日に中村憲吉に宛てて「白秋曰くアララギに斎藤の書信なく霸王樹にありアララギ同人皆赤彦に離ると」と、孤立的な立場にある自分の苦しい心情を訴えている。このような状況の中であって行き詰まり、殆ど神経衰弱に陥っていたのである。

講義が始まって二日めであった。万葉集卷十四の講義をしている最中に突然地震が来、会場となっていた二階裁縫室のテーブル上の大花瓶が揺れ、天井が波打った。

驚いたものの、地震はやがて揺れが収まったので、赤彦は昼休みのあと午後の講義を再開した。

翌二日の午前も万葉集の講義を続けた。ところが午後になると、昨日の地震で東京が大災害を受けたとの新聞報道が届いた。帝都では想像を絶する大災害が発生し、交通・通信も途絶したとの報道である。詳細を得たいと願ったが、得ることができず、焦慮の思いに駆られた。中央東線も韭崎以東、特に猿橋以東で地震による地崩れがあり、不通になっていたのである。

赤彦は、東京の発行所、平福百穂、岡三郎（岡麓）、岩波茂雄、古今書院主人の橋本福松に宛てて安否を問う電報を打ち、葉書を書いた。「地震発行所如何同人如何心配也電報とこのハガキと遅速如何焦慮の至に候」（九月二日付藤沢古実宛書簡）、「只今洗馬よりハガキさし上申候。今日になりて東京大地震を聞く。御一家御難儀なかりしか心配の至に候。電報出し候へ共ハガキさし上申候。どちらが早くつくか汽車も不通のよし焦慮の至に候。明日ハこゝを去り可申候。」（同日付平福百穂宛書簡）

翌三日になって新聞により一部の不通区間を除いて信越線が通じ

ていることを知ると、直ちに上京を決意し、講義を中止した。

下諏訪高木の自宅に戻り、妻の不二子に命じて、食料品四、五貫目をリュックサックに詰めさせ、この日の夜、家を出た。迂回して信越線で上京すべく下り列車に乗ると、車中はすでに混雑を極めており、辰野駅で篠ノ井線に乗り換えるのに十時間を費やした。篠ノ井駅に至って信越線に乗り換えようとしたが、果たせず、川中島駅まで下って見たものの、ここでも乗ることができず、さらに長野駅まで下った。

長野駅で藤沢古実に宛てて次のように書いている。「心配の至也昨日出発停車場毎に乗り得ずして後に乗り残され遂長野に来てこゝより今午後四時乗りこまんと思へど乗れるか何うか乗れても市内に入り得るか否か気遣ひ也せめても心やりに此ハガキ書く體無事ならんことを神明に祈る」

長野駅で藤森青二と邂逅し、同行することになった。

漸く貨車に乗り込むことができたが、「車上客の雑踏言語に絶す」（「震災報告」『アララギ』大正二・一〇）、「各駅人波澎湃として戦争の如し」（九月七日付久保田不二宛書簡）というような有様であった。

無蓋の貨車は、翌五日の朝、埼玉県の大宮駅に着き、ここで下車させられた。大宮駅から不二子に宛てて、「今こゝに来了。今日中には東京に入り得る。皆々自愛の事。九月五日朝七時 大宮にて」と書いた葉書を投函している。

赤彦は重いリュックサックを背負ったまま、七里の道を歩いて午後、アララギ発行所に到着した。途中、一部の区間は自動車に乗ることができたらしい。

発行所では、震災により補充する手立てがないので米が殆ど尽きかけ、また電灯も点灯しない状態であったが、建物自体は被害を免れていた。発行所にいたのは、藤沢古実のほか、岡麓とその家族である。

麹町区元園町にあった麓の家は、地震後発生した猛火の襲来に遭い、一度は被災を免れたものの、二日の夜に再度襲ってきた火流に吞まれて焼亡した。家族八人は第一夜を四谷見付の路傍で、第二夜を市ヶ谷見付の芝生上で過ごした後、着の身着のままの姿で発行所を頼ってきたのである。

滞京中、赤彦は罹災の状況の把握と諸方との連絡に極力努めた。平福百穂、岩波茂雄を始めとして、斎藤茂吉の留守宅、古泉千樫、土屋文明、広野三郎、竹尾忠吉、高田浪吉など同人、会員、アラギの関係者は、みな災禍を免れたことが確認された。

「この行少くも一二知己に不幸あるを予期せしに、一同無事なるを知りて驩喜に堪へず。」と赤彦は、『アラギ』の大正十二年十月号に収めた「震災報告」に記している。

災害の激しかった横浜に住居のあった築地藤子の身の上が心配されたが、これも後日無事でいることが判明した。

アラギ自体の受けた被害も予想外に軽くて済んだ。発行所となっていた岩波書店の神田神保町の店は全焼、店に置いてあった『アラギ』の九月号はすべて焼失したものの、発行所に届けられていた会員配布分は焼亡を免れた。

印刷所としていた麹町区紀尾井町の元真社も大きな災害を蒙らないで済んだ。「元真社印刷所も幸に火災を免れ居り、十一月号よりは殆ど完全に雑誌を出し得べしと存じ居り候。」と「震災報告」(大正二・九・一二記)で記している。

古今書院から九月に刊行する予定で二校まで校正を済ませていた『第二赤彦童謡集』は、組版、写真版、金版その他が焼失した。しかし原稿と原画は焼けないで残っており、「小生の第二童謡集は再校正の中途組版全部を失ひ、口絵挿絵の写真版等をも失ひ、且つ表紙、見返しの紙等全部を失ひ、可なりの損害に候へども、原稿全部と原画全部は古今書院に保存有之安心致し候」(「震災報告」)と安堵の気持を記している。

十一月号より『アラギ』を発行できる見通しを持ったが、しかし、部数を従来どおりに保つことは全く期待できなかった。「九月号は半分の冊数を焼失し、表紙写真版金版をも焼失致し候。印刷冊数も十月号より当分店に出す分は全滅せざる可からず。」(「震災報告」)と赤彦は書き、冊数が回復するまでなるべく多くの会費を前納してくれるよう、同人、会員に依頼状を出している。

地震が発生した時、平福百穂は上野竹之台の展覧会場にいた。第十回日本美術院の展覧会で、この日は初日の招待日であった。今回の出品作の中では横山大観の「生々流転」の前評判が高く、開場と同時に多くの来場者が押し寄せた。

場内を一巡したあと百穂は、この大観の絹本二尺幅、延長一五八尺という空前の長巻の前に立っていた。そのとき、地震に襲われたのである。

百穂は冷静にしてしばらくその場を離れなかったが、やがて場外に出て、桜ヶ岡に立って火災のため煙に包まれている下町の方面を眺めた。

その場に午後一時半くらいまでいて、家に帰ろうと歩き始めたものの、交通機関がすべて止まり、市中は安全に通れそうにないので、線路伝いに帰途につき、六時間余りを費やして夜の十一時半近く漸

く市外上目黒の自宅白田舎に帰宅した。

翌九月二日と四日の両日に、百穂が諏訪の赤彦に出した書簡には震災の惨状が次のように生々しく記述されている。「大震 猛火酸鼻の極に候。小生昨日上野展覽會へ出かけ、十二時頃猛震引続き強震不止 通路の安全を期する不能一時間餘上の台に形勢觀望（両小林嶋田等先に目黒へ帰る）するに本所深川浅草神田日本橋方面十ヶ所餘火の手揚り丸の内は安全に通られず上野に引返し山の手線路につき凡そ六時間餘を費して帰宅一同無事なるを見てホット一息つき候。今尚諸所延焼中。火の手はいづれの方面も焼くるがままに延びる。山の手方面ハ比較的怪我人なし。大学病院順天堂駿河台、神保町砲兵工廠警視廳大藏省内務省（コレハ神田系の火）其他御推察被下度候。横浜又全滅の由 火の手見え候」（九月二日付）

「一日の強震にて引続き火災諸方に起こり見る火災の猛威に任せ二日の夜に至るも猶止まず本所深川浅草下谷の殆んど全部、日本橋京橋神田一戸を除かず本郷、小石川（砲兵工廠）芝、麻布赤坂山王台下一帯、麹町区番町半蔵門外九段に至る、丸の内、新宿の一部、焼失、惨状筆紙に尽し難く千古未曾有の事に候茫々たる焦土只驚き呆る他なく候波多野氏、伊達錦ら門人伊東氏尤も不安、何等消息なし浅草方面へ逃れしとすれば無論生命なきものならん、其他知人二重橋前又は日比谷九段上野に逃げたるものは先づ安全ならむも或ハ離散火災に巻かれたるものあらむか心痛このことに候 昨日各方面を探りたるも皆判らずこの断定を下すより他なし。小生一家（家屋も）無事、此段御安神願上候。東京駅無事、ビルディング等大破アサクサ觀音音字等に避難せるもの皆黒焦げにかたまり居る由。永代橋両国橋阿鼻叫喚の地獄に候。岡さんは二日の晩焼け出され候。」

（九月四日付）

この百穂の書簡に見られるように、災害が最も激しかったのは、東京の下町である。

アララギの仲間では、まず本所区で下駄塗職を家業としていた高田浪吉一家の安否が氣遣われた。赤彦は上京の車中でも浪吉一家の身の上を案じていた。

五日の午後、赤彦が発行所に着いた時には浪吉の行方は不明で、消息は夜に入っても聞くことができなかった。ところが浪吉は翌六日になって、発行所に姿を現した。赤彦は七日に中村憲吉に宛てて、「高田昨日になり漸く来る（シャツ一枚にて）一日昼より朝まで隅田川につかり居て助かりし由背には火のあと點々たり母妹四人見込なしとの事高田は本所ゆゑあきらめ居りしに天佑なり川に居りし人大抵死にし由也」と書いている。また「震災報告」では、次のように記している。「浪吉の家は本所番場町にあり。一日午後一二時頃火災に包まる。初め隅田川に流れ来れる一片の板に縋りて水中にあり。後伝馬船に移る。兩岸の火勢猛烈にして舷の燃えんとする恐あり。手を以つて絶えず水を注ぎ、體を水中に浸して数々熱氣を避く。夜半退潮の時流勢漸次急にして、吾妻橋より厩橋に流さる。船を橋杭に繋がんとして果さず。船を捨てて東岸に遁る。東岸火勢猶退かず。多く水中に潜んで翌朝に至り、漸く身を以て免るを得たり。父と二人無事。母と妹三人今猶行衛不明。多分無事なるを得ざらん。初め発行所にあるもの浪吉を以つて最も危険なりとし、中村時次郎、藤沢古実交々本所方面に赴きしも消息を得ず。遂に絶望なりと為して追憶談に耽れり。六日午前十時浪吉シャツ一枚を纏うて発行所に来る。相見て一語なし。天佑の一也」（大正二・一〇）。天佑の一に数えているところに浪吉と相見た時の赤彦の感動の大きかったことが窺われる。



高田浪吉が発行所に姿を現した六日の午後、赤彦は市中の災害の状況を見ようとして、藤沢古実を伴って、下町方面に出掛けている。

赤池警視總監の要請を受けて九月二日の夕方、戒厳令が東京市十五区と隣接五郡に公布、施行されており、三日にはそれが東京府と神奈川県全域に、四日にはさらに埼玉県、千葉県にまで拡大されていた。混乱の中で自衛のために町々に結成された自警団は、行動に行き過ぎがあったことにより、四日以降取締の対象となっていたが、軍隊の出動で警戒態勢は行き渡っていた。地震以来連日続いていた余震は、六日の午前には著しく減衰したとはいえ、午前中には七十八回が記録されているほどで、燃え落ちた建物にはまだ火が見え、余燼が立ち上っていた。

「下町から本所深川は一望数里ただ焦土である。小生のこの間を歩いたのは六日であるが、日本橋下にも、外濠にもまだ死屍が浮んでゐた。」「そろそろ歩いてゐる群衆の顔が異常で、夫が皆黙してゐる。聞えるものは救護用の自動車の陸続往來する音ばかりである。

歩むに従ひ懐愴感が怪異感になり、それに異臭が鼻を衝いて到底歩を続けるに堪へない。銀座から日本橋に出て、それから道を外濠に転ずるまでに嘔吐を二回した。信濃から三日がかりで上京した疲労の上に頭を刺激することが餘りに急激異常であつたためであらう。

神保町停留所で岩波書店の焼跡を見たときは感慨が特に深かつた。」「目に見るもの」「アララギ」大正二・一〇

「地震大した事なけれど火にて大変になれり下町全部焦土死屍まだ片付かず小生へドが出はじめ日本橋より鎌倉河岸へ外れしもあの濠にも屍あり全く地獄を目の前に見る心地也」(九月七日付中村憲吉宛書簡)

震災で最も大きな人的被害を出したのは、本所区の陸軍被服廠跡であるが、赤彦は、この日は、江東地区には足を踏み入れていない。赤彦の第四歌集『太虚集』に収められた連作「関東震災」の詞書に、「六日下町震災中心地を訪ふ」とあることや隅田川の架橋の中で両国橋と新大橋の二橋は焼け残ったことなどから被服廠跡も訪れたのかと思われないではないが、橋を渡るのも容易なことではなく、江東方面を望んで、途中で歩を返したのである。

夕方発行所に戻ると藤森青二が来ており、発行所に一泊して翌朝帰郷することになった。

赤彦の書き残したものの中に証を見出すことはできないが、この度の上京で赤彦の最も気掛かりであつたことの一つは、かつて丘小学校の校長であつた時に部下の教員であつた中原静子の消息であつたろう。静子は赤彦と特別な関係にあつた女性であるが、当時においてはアララギの中では誰もそのことを知る者はなかった。

その静子は、大正十二年五月に川井明治郎と結婚、東京に新居を営んでいたが、夫の明治郎は健康が勝れず、結婚後まもなく病床に就いていた。

静子は夫を背負って、幸いにも上野公園の不忍池畔に避難することができた。静子の遺歌集『丹の花』の中に「帝都震災」と題する四首の作が収録されている。

病み伏せる夫を背負ひてのがれ来し蓮池の花ゆれ静まらず  
反動のゆれを氣遣ひ池の辺に仰向けに寝て花をたのしむ  
あきらめし顔は仰寝て静かなり冷えし牛乳のみて目つぶる  
何事も運命なりしか病む夫を看護みとりて今年も余日すくなし

赤彦は結局、この度の上京では静子の消息を聞くことはできなかったであろう。

七日になると、「暴利取締勅令」「支払猶予の緊急勅令」「流言浮説取締令」が緊急勅令として公布、即日施行された。

この日には各地の会員から、発行所に見舞や激励の手紙が届き始めたらしい。それらの手紙の中には、後にも触れるように、アララギの今後を心配するものが多くあったと赤彦は記している。

八日になると、電報が通ずるようになった。一人一通に限って受理されたので、赤彦は中村憲吉に宛てて状況を報知した。大阪毎日新聞社に勤務していた憲吉は、八方手を尽くしても東京方面の状況を把握することができず、不安と焦燥に駆られていたが、頼信紙に書かれたままの電報を受け取って在京同人の無事を知り驚喜した。斎藤茂吉はベルリンの日本大使館宛に打った憲吉の電報によって家族の無事を知った。

### 三

赤彦は中央線が復旧して運行を開始し、上京以来の足の痛みも和らいだので、九日に帰郷した。

諏訪に戻った翌々日の十一日に、「東京の印刷少し秩序立つまで上京せざるつもりに候。御地へ参上は二十日前後がよろしきか御都合御手紙にて御知らせ下さればよろしく候」と伊那小学校の小島守人に宛てて書き、県内の他の土地に万葉集の講義に出掛けることにしているとところからみると、この時の赤彦は、今後しばらくの間は上京を見合わせるつもりでいたのであろう。

赤彦はしかし、『アララギ』の十月号を発行する準備に取り掛かっている。その気持を固めたのがいつか明確に知ることはできない

が、九月十二日付の市毛豊備宛の葉書に「小生三日上京九日帰宅仕候。十月号は報告号にして出し可申候」とあり、中村憲吉宛の葉書にも「十月号は四頁乃至六頁を震災報告号として出し申度それ以上の事は逆も出来ずと存候。上スワで印刷不能ならバ貴方へ御願可申上如何候か伺上候。」(九月十二日付)とあることからすれば、そのことは諏訪に帰着した時にはすでに脳裏にあったのではなからうか。右の憲吉宛の葉書を見ると、十月号をどこで発行するかはまだ未定であったが、翌十三日付の藤森省吾宛の葉書では、「アララギ十月号を四頁か六頁にして報告号としたい。上スワで刷りたい。御厄介様ながら印刷屋と御交渉奉願候。」と書いており、十五日付の上村孫作宛の書簡では、「十月号は震災報告号とし来る二十日私方より刊行」と書いているから、九月十四日か、十五日のうちに上諏訪で発行する見通しをつけることができたのである。

赤彦が発行を急いだ理由は『アララギ』の十一月号の「編輯所便」で、「十月震災報告号は九月二十日夜信濃から発送した。震災につき、各地から同人の消息を問合せ、アララギの運命を心配して下さる方々が多く、書信机辺に堆積の有様であつたから、紙数薄くとも、早く報告号を出した方よしと思ひ、独断であゝいふものを出したのである。大方の御諒知を冀ふ。会員諸君のアララギを心配する心情は有難い。心の籠つたあの書信は悉く一筐底に収めて震災の記念にするつもりである。」と記していることからその間の消息を知ることができる。

十月号は右の「編輯所便」に見られるとおり、「震災報告号」として発行された。発行の日付は十月一日となっているが、発送を完了したのは九月二十一日の夜である。

「震災報告号」の表紙には、『金槐和歌集』の源実朝の一首、

炎乃美虚空爾彌手留阿鼻地獄行方毛那之止言布母波迦那四

(ほのはのみこくうにみてるあびちこくくへもなしといふもはかなし)

が印刷されている。震災後、一面の焦土と化し、死屍の一部はまだ放置されたままの東京の惨状を見てきた赤彦の脳裏に浮かんだのは、まずこの実朝の歌であったのであろう。

「震災報告号」に収められたのは、赤彦の「震災報告」と「目に見るもの」、それに「諸消息」である。これには平福百穂、広野三郎、中村憲吉の書信を収めている。末尾には会員の被災者を見舞うための義捐金の募集記事が付されている。

赤彦は「震災報告」(大正二・九・一三記)において「今回の震災は、日露戦争以上の死者を出し、且つ、優に大戦争費以上の財産を消失したる儀にして、国家として、人類として、重大事件に有之、国民非常の覚悟を要し申すべく存じ候。」と、非常時に際会したことの自覚を同人、会員に促すと共に、「本号は急遽上諏訪にて印刷、斯の如く頁数少きの已むを得ざるに至り候。」と小冊子となった事情を説明している。はじめ四頁か六頁と思ったのが八頁になったのであるが、それでもなお小冊子であることを気にしたらしく、中村憲吉に宛てて、「十月号は実に見すばらしく却つて出さぬ方よりし程に今思へど会員より危惧のハガキ頻に来りしゆ急に出す気になり報告だけしたわけなり御承知願ふ」(九月二十二日付書簡)と釈明して了解を求めている。

しかしながら「震災報告号」の発行は、赤彦の懸念を吹き飛ばしてなお余りある成功を収めた。「報告号」の返事各地より頻りに参り何れも無事を欣ぶの至情溢れ居り涙ぐましく計りうれしく存じ候。これは皆記念に保存するつもりに候。矢張報告号を早く出してよか

りし感有之候。義捐金も昨日より来はじめもう八十円に達し候。四日上京までには可なり集まり申すべきかと存じ候。」(九月二十七日付)と平福百穂に宛てて書き、また、「昨今各地会員より緊張せる激励の詞蜚集し小生も新鮮なる刺激を得快く存じ居り候一つ奮発するつもりに候。御鞭撻の程奉願上候。」(九月二十七日付)と岡麓に宛てて歎びの気持を伝えている。「震災報告号」を発行したことによって返ってきた会員からの反響は、孤立無援の心境に陥っていた赤彦に新たな勇気を与え、奮い立たせたのである。

十一日にしばらく上京しないつもりだと書いたばかりの赤彦であったが、九月十七日、上諏訪警察署に「東京往復証明書」の交付を願ひ出て下付を受け、十九日に再度上京している。

これは中村憲吉宛の九月十七日付の「十一月号より東京で印刷できぬとすれば貴説に従ふを可とす。是最も幸福なり。大阪にて岩波書店の如く発売所になりくる確実なる店ありや。是を第一に御考へ置き願上候。明後日上京の上貴書を画伯岡二氏にも見せ申上げて相談。猶印刷所及び岩波書店の計画も伺ひ申度存じ候。帰国の上御返事可申上候。十月号は八頁にして震災報告号。二十一日に発送する。」と書いた書簡と、「大阪出版は東京で印刷不能の場合にしたい。発売所の岩波さんの意見も聞く要あり。上京の節元真社と画伯岡岩波諸氏と相談せん。」と記した書簡の先後は不明であるが、これらが、憲吉が東京の印刷所の機能が回復するまで大阪で『アララギ』を発行してはどうかとの意見を寄せたのに対する返事であることから、この問題について見通しをつけるため急遽上京することにしたのであろう。この時点ではまだ東京への郵便も通じていなかったのである。

上京した赤彦は二十日に元真社の支配人、岩波茂雄等と会った。

『アララギ』の印刷、発売について両者から協力の約束が得られたことは、帰郷した二十一日の夜、中村憲吉に宛てて、「昨日元真社支配人の逢ひしに十一月号よりは確実に引受けるとの事次いで岩波氏を訪ふ氏も今迄通り発売所になる事勿論なりと言はる（中略）右につき御配慮下さりし印刷問題は充分解決つき次第御安心被下度候猶万々一の場合も考へざる可らず御留意願上候」と結果を報知していることから明らかである。

右の書簡に、続いて、「斎藤輝子氏を訪ひしに君の電報大へん喜び申候宅では十三日打電せし由に候輝子さんも大童にて連日働きよしよき事也復旧修繕に金かゝる事も話し候」とあるから、二十日には赤坂区青山南町の茂吉の留守宅も見舞い、茂吉夫人にも会ったことが知られる。

この日にはまた小宮豊隆、古泉千樫の家も見舞っている。そのあと、平福百穂の白田舎を訪問したが、百穂が不在であったので、ます夫人と話して発行所に戻った。ところが夜に入って岡麓、橋本福松、藤沢古実、高田浪吉の四人と当面の対策について相談していると、そこへ百穂がやって来た。そして「震災報告号」に続いて十月号をもう一度発行するようにと激励した。「夜画伯雨をついて来訪せられ、アララギ報告号は臨時号として十月号を平常の如く出すやう是から著手如何との事此元氣に並みある岡橋本藤沢高田小生大に堂弱たり」（九月二十一日付中村憲吉宛書簡）と赤彦は書いている。百穂の激励に対しては赤彦としても勿論応えたい気持を強くもつたに相違ない。殊に白秋等他派の歌人との間で論戦を交えていた時期のことである。競争心は人一倍に強かったのである。しかし、いかに考えても、百穂の意見を実行に移すだけの時日の余裕はありそうになかった。それで結論は「十一月号を倍大号にしてウンと厚くし

て出す事になれり（十月号は是から著手とてもできません）」ということに落ち着いた。

二十日の夜の相談会では、同人その他から「震災雑感」の寄稿を求め十一月号に特輯することも話し合つて決めた。その企図について、十一月号の「編輯所便」で、「今回の震災は戦争と異つた深い刺激を人類に与えてゐる。これは詩歌文学芸術は勿論人類生活の根柢所に響いて来る刺激である。それを一々アララギに書きとめて置きたく冀つたのである。」と説明している。十一月号の原稿を十月十日に元真社に渡す約束をしていたため、締切日を十月五日と定めた。

義捐金の募集については、被災者の数がなお不確定のことでもあつて、締切日を延期した。

この二度目の上京は、地震から二十日が過ぎており、災害の全貌が漸く明らかになってきていた。

地震の起きる八日前の八月二十四日、内閣総理大臣海軍大将男爵加藤友三郎が病死し、元老西園寺公望の奏薦によって、摂政宮からは伯爵山本権兵衛に組閣の本命が下つていた。しかし政党間の調整が難航し、新内閣がまだ成立をみないうちに地震が起きたのである。災害の発生により組閣作業は促進され、地震の翌日の九月二日には第二次山本権兵衛内閣が成立した。

新内閣の内務大臣に就任したのは後藤新平である。半年前まで東京市長を務めていた後藤の活動は目覚ましく、六日の閣議には早くも「帝都復興の儀」が提案された。地震後一部に出ていた遷都論も、九月十二日大詔渙発、「一朝不慮ノ災害ニ罹リテ今ヤ其舊形ヲ留メスト雖依然トシテ我國都タルノ位置ヲ失ハス是ヲ以テ其ノ善後策ハ独リ舊態ヲ回復スルニ止マラス進ンテ将来ノ發展ヲ図リ以テ巷衢ノ

面目ヲ新ニセサルヘカラス」との勅旨が国民の前に明らかにされて消えた。

このような政府の対応も人心を励ましたであろう。赤彦は前回上京した時と比べて僅かの間に東京の空気が明るさを増してきていることを感じた。事実、巷には早くも復興の気分が出ていたことは、たとえば、九月十八日の『東京日日新聞』に、「市内焼跡一巡記よみがへる東京 残灰の下から湧き出る力」の見出しで、廃墟と化した焼跡の四方八方から木の音、手斧の音が聞こえ、トタン葺きのバラック式の仮小屋が続々と建ちつつある様子が報道されているのを見ても肯ける。

赤彦はこのような東京の状況を目前に見て心強く思い、日本の将来に希望を持った。「十日の間に東京人の面上にはずんずん活気が現れてゐた。それを非常に心強く思ふ。広い焼跡に忽ちにして仮小屋が建つて、勢よく商ひをしてゐる所を見ると、野火のあとから直ぐ草の芽をふく心地がする。日本人はいつも若いといふ感がある。これは常若の国である。」と「震災雑感」に日本の将来への期待を書き付けている。

赤彦がこの二度目の上京で東京にいた期間は極めて短く、九月二十一日の早朝発行所を出て、諏訪に戻った。上諏訪駅に着いた後、駅近くの森山汀川の家に立ち寄り、「震災報告号」の発送を手伝っている。

この頃、赤彦の許に南満洲鉄道株式会社の社会課長牧野虎次の名義による講演の依頼状が届いた。同社では、毎年、在満邦人のための文化事業として、内地から講師を呼び、本社の所在地である大連を始めとして沿線の各地で講演会を開くのを恒例としていた。今年度は俳壇から河東碧梧桐が、歌壇から赤彦が講師の候補者として挙

げられたのである。満洲日日新聞社に勤務していた池内忠義の提言によるものであったという。

満洲は海の彼方の大陸の地である。震災後なお日を経ておらず、諸事多端なこの時に遠く海彼の地に講演にでかけるということが赤彦を逡巡させた。とはいえ、満洲は、日清、日露の戦争でわが国の軍人が国運を掛けて戦った土地である。遼東半島には日清戦争の際、正岡子規も、周囲の人々が健康を氣遣って引き留めるのも聞かず、病身を押し従軍している。当時は赤彦の生育した山浦地方の農家の飼馬も多く軍馬として徴発された。日露戦争では、尊敬する乃木希典、森鷗外らを始めとして多くの軍人が従軍し、わが国は夥しい犠牲と引き換えに漸く勝利を収めることができた。この二十年前の日露戦争の記憶は、まだ生々しいままで国民の中に残っていた。郷里の後輩である小尾喜作や、今や作歌の上で強敵となった長野師範の同級生太田水穂もすでに大陸に赴いて日露戦跡を巡っているし、先年、友人の伊藤長七も訪れている。

赤彦の心は渡満に傾いた。『アララギ』の編輯の仕事の調整がつかどうか問題であったが、何とか時日を生み出せそうに思えた。赤彦は家族の意見も聞いて、結局、招聘に応ずることを決意した。満洲に行くのは、同地の人々に自分の歌道についての考えを語る好機会であるし、在満のアララギ会員に会える楽しみもあった。しかしそれ以上に赤彦は、大陸を旅し、異国の風土に触れることによって、震災の衝撃により覚醒された己れのさらなる再生を願ったのである。

赤彦が三度目に上京したのは十月三日である。二十一日に帰郷した時には十月七日に上京、八日に会員と面会、十日に元真社に十一月号の原稿を渡すつもりでいたところ、印刷所から五日までに原稿

を入れるよう求められ、予定を早めたのである。

この度の上京では、渡満して不在になる間の事務処理についての仕事の調整が主要な用務の一つであった。藤沢古実の入営の時期が迫っていたことから、格別な配慮を必要としていたのである。

仕事は予定どおり、順調に運んだらしい。赤彦の留守中はもちろん、古実の入営後も、罹災した高田浪吉が発行所に起居して古実の代わりを務めるということで調整がついた。むろん平福百穂や岡麓も協力を約束してくれた。

この三度目の上京の際、赤彦は隅田川を渡って江東地区にも赴き、本所区番場町の浪吉の家の焼跡と横網町の陸軍被服廠跡も訪れている。浪吉が赤彦の案内役を務めた。

被服廠の跡地は、旧幕時代に本所御蔵と呼ばれていた所で、材木や竹などの資材置場になっていたところから、お竹蔵と通称されていたが、明治になってそこに陸軍被服廠ができた。震災の前年の大正十一年に、この土地の一部が通信省に移管され、残りは東京市が払い下げを受けて、公園や社会事業その他の施設の建設のために整地していたのである。二万坪の広大な空地になっていたので、地震で火災が起けると群衆はこの空地に押し寄せた。中には大八車に家財道具を積み込んで引き入れた避難者もあった。さしも広大な空地もやがて、四万人にも達する避難者で溢れた。そこへ三方から猛火が迫り、午後四時頃、旋風が巻き起こって、火災が空中を飛んだ。こうして、この空地に避難した大多数の者は業火に焼かれ、焦熱地獄の中で無惨な焼死を遂げたのである。

九月七日に現場に行って見た岩波書店の店員の小林勇は、後にその場の様子を次のように記述している。「被服廠跡に近づくとき異臭が漂っていた。広場は死体で埋まっていた。広場には垣があり、幾

つかの入口があつて、そこには人が内側から外へ出ようとして倒れ、その上にまた倒れ、それを乗り越えようとしてまた倒れて、その高さが三メートル以上あるように見えた。広場に充満した人たちは、荷物をもっていた。火事で熱しられた空気が渦巻、竜巻のようになって広場をおおひ、人々は先を争って逃げようとしたものと思う。屍体の広場を、幾人もの人が近親者を見つけているのであろう、歩いている。兵隊が薪木を投げている。石油をかけて、そのままここで屍体を焼くのだという。ここでの死者は三万四千人といわれている。」（関東大震災のころ）『一本の道』昭和五・六）

小林は焼死者数を三万四千人と記しているが、今日の通説では、犠牲者の数は三万八千人とされている。

被服廠跡地を埋め尽くした死体は、その後、新鋭の重油火葬炉を使用して同地で荼毘に付し、大壘と木箱に収めて仮納骨堂に安置し、九月一日から四十九日目に当たる十月十九日に府市合同で四十九日祭を催した。仮納骨堂は五十六坪のバラック建の急造したものであったが、赤彦が訪れたときには完成しておらず、遺骨は焼かれたまま、まだ広場の土の上に堆く積まれていた。

やがて、本所区の相生警察署長が、避難する群衆を抜剣までして、広場に誘導した責任を感じて自殺したとの風説が世上に流れた。事実は署長自身、群衆と共に焼死、殉職したのであるらしいが、赤彦はこの風聞を信じて、震災詠の中に、署長山内秀一の死を悼む一首を残している。

この日は正岡子規や伊藤左千夫の遺族のもとにも赴き、直接見舞いを述べている。両家は共に災害を免れ、家人も無事であった。

三度目の上京から諏訪に帰着したのは十月十日の夜である。帰宅すると、南満洲鉄道会社からの書状が届いており、汽車の乗車券も



送付するのでぜひ御来満頂きたい旨が記されていた。

赤彦は十二日、承諾の電報を打ち、池内忠義その他満洲在住のアラギ会員に渡満のことを通知した。

赤彦が満洲への旅に発ったのは十月十八日である。上諏訪駅午前一時半発の汽車に乗り、中央西線を経て名古屋に出、東海道線に乗り換えて午後神戸駅で下車した。ここで中村憲吉と加納暁に会い、あらかじめ借用を依頼しておいた加納の冬用の洋服に着替え、三人で夕食を共にした後、再び乗車して下関駅に向かった。翌朝下関港で関釜連絡船に乗船した赤彦は、対馬海峡を渡り、夜朝鮮半島の釜山に上陸すると、鉄道で半島を縦断北上した。翌弘明京城で「支那官人二三下車の後」は車中赤彦一人という寂しい旅を続け、鴨緑江の鉄橋を渡って、夜満洲に入った。奉天で乗り換えて、二十一日の朝、大連に着いた。

満洲における赤彦は、まず案内を受けて旅順を訪れ、日露戦跡を巡拝、国のために勇敢に戦って戦場の土となった日露両軍の将卒の霊を弔っている。「小生は震災後一个月を隔て、旅順二百三高地の頂上に立つた時、つくづく思ったのである。数万の人類がかうべを並べて斃れたもの、東に被服廠跡あり、西に二百三高地あり。昨日その東を踏んで、今日西の地に立つは堪ふべからざる感慨である。二百三高地では夕日の渤海湾に入り果つるまで山の上に佇立した。」

〔巻末記〕『太虚集』大正三・一〇

赤彦はそのあと、関東庁立大連高等女学校で講演をしたのを皮切りに、大連・奉天・長春・撫順・鞍山・金州等の満鉄沿線の各地に講演の旅をした。奉天から、二十四日、発行所に留守を守る藤沢古実・高田浪吉に宛てて、「大連より奉天まで汽車十一時間の間すべ

て日露戦争の跡也今日奉天北陵を拝観し規模の宏壮にして輪奐の美なるに驚けり昨夜又雪ふる今日天晴れて寒き事信濃の冬に等し小生元氣旺盛也万事願ふ明日長春明後日撫順（二泊）次に鞍山次に温泉次に大連次に出帆下ノ関に向ふ万事願ふ」と満洲に来た感想と今後の旅程を知らせている。講演会は夜のことが多く、講演を済ませて一泊すると、翌日の昼間は、一望涯なき平蕪の曠野をひた走る汽車中で過ごすという慌ただしさと寂寥感とに満ちた日々であった。

講演の題目としたのは、主として「万葉集の系統」で、これは大正八年十月に三田短歌会からの依頼によって慶応大学図書館において与謝野鉄幹と並んで行った講演の内容をさらに深めたものである。講演会は、奉天などでは連絡が悪く、満鉄事務所の職員の応対もおざりで、赤彦を憤慨させたが、概して好評で、各地で暖かいもてなしを受けた。鞍山の後は湯崗子温泉に一泊、湯に浸って旅の疲れを休めるのを楽しみにしていたが、風邪を引き、用心して取り止めて大連に戻った。講演は帰国を急ぐため五箇所にしぼったはずが、結局八箇所になり、大連港で台南丸に乗船、帰路につくことができたのは、予定より三日遅れた十月三十日の朝であった。

船が黄海を越えて下関港に着いたのは十一月一日の正午である。赤彦は下関から大連の池内忠義に宛てて「正午十二時無事こゝにつく。今回は非常に御厚意を蒙り感謝の至に耐へぬ。御蔭様で満洲の大自然に面接出来ました。船は無事。港へつく時時雨来る。丁度よい具合なり。」（十一月一日付書簡）と礼状を認めている。

二日の未明、神戸駅に下車すると、加納暁に洋服を返し、中村憲吉、加納と三人で夜の十時半まで話した。諏訪に帰着したのは三日の午後三時であった。

赤彦は満洲への講演旅行から帰国した後、大陸で引いた風邪を癒すためにしばらく自宅で休養すると、十一月六日に上京した。

満洲に出ている間に「震災号」として編輯された『アララギ』の十一月号が発行になっていた。

「震災号」は、その名の示すとおり、百穂の「被服廠跡」の絵を口絵として用い、諸家の「震災記」を収載した震災特輯号である。赤彦の執筆した「震災雑感」もその中に含まれているが、末尾に十月二日と明記されており、渡満する前、三度目に上京する前日に草したものであることが知られる。

『第二赤彦童謡集』も早くも新たに組版されて古今書院から発行になった。

上京して数日経った十一日、郷里から養父の政信が重病との電報が届き、赤彦はその夜に東京を出て、帰郷した。

政信の病氣は重篤というほどではなく、前夜注射と浣腸をした後は病状も平静に向かつており、安堵した。しかし時々原因不明の発熱があるので、他出を控えることにした。政信の病氣が快方に向かい、やがて回復したのは年末に至ってからである。

赤彦が諏訪の自宅に在る間に、十一月二十八日付で『アララギ』の十二月号が発行された。「編輯所便」は藤沢古実が書き、赤彦は「信濃便り」を寄せた。

十二月一日、藤沢古実が世田谷の砲兵連隊に入営した。赤彦は「藤沢古実は十二月一日世田ヶ谷の砲兵隊に入営しました。一日の払曉まで選歌をし、夜が明けて顔を洗って出立しました。発行所には今後高田浪吉が居り、竹尾、辻村、高木その他諸氏が手伝つてくれる筈です。」と『アララギ』の大正十三年一月号の「編輯便」に書いている。赤彦が諏訪の自宅にいたままで、発行所を守るのが古

実から浪吉に代っても、結社の運営には著しい支障をきたさないほど、今や態勢が固められたのである。

#### 四

震災の発生とその後における赤彦の行動は、上述のとおりである。その敏速にして適切な対応と行動とは、結社の主宰者としての赤彦の適性と有能をよく証するものであらう。

赤彦の震災との関わりは、しかし、このことに終わるものではない。

赤彦は地震後の最初の上京から帰郷した後『アララギ』の十月号を急遽「震災報告号」として発行し、その中に「目に見るもの」と題して、見てきた東京の惨状についての感想を記した。

赤彦の言うところは、「一体現今の文明は、自然を征服することを知つて自然を尊重することを忘れてゐる。」ということである。「文明の中心をなす都会人は、あらゆる人工の便利と快楽とに委託して、庭に一本の樹木なきにも安んじ得る程度に迄押し進んで」おり、「今回の惨害には自然を無みした報いがかなり多い。」というのが偽らざる感想であった。

赤彦は、「惨害に目をさました都会人は、自然物の如何に尊いものであるかに思ひ至つていい。樹木は地震と共に倒れない。禽獣鳥魚は地震と共に死なない。五日代々木の家に寝た時、町民は未だ警戒の大騒ぎをしてゐるのに、家の庭には蟬がいつものように鳴ききつてゐる。自然に遠ざかるものほど、その恐ろしさを平常自覚してゐべきである。」と書き、続いて次のように記している。

「元来、地震といふことは大地の自然現象であつて、少しも不自然な現象ではない。地震によつて大惨害を被るのは平常不自然な人工

物にのみ依拠してゐたものがその最をなすべきである。都会の各地に大空地を作り、草木を茂らせ、道路を拡大して同じく樹木を茂らせ、各戸必ず樹木を立つべき餘地を置かしめ、電線の類の如きは悉く地下に埋没せしめれば、今までの都会は面目を一新して、ここに多少自然物との親しみを生じてくるであらう。」

赤彦が強調しているのは、自然を尊重し、自然に親しむことの重要性である。そのことを「自然との親しみ。これが唯一人間のどん底を作り得るのである。」と赤彦は言う。そして、「これは歌に於て平素我々の主張した所であつて、斯様な事変に際して、殊にその感を深くするのである。」と述べて、具体例を挙げて西洋文明に汚染された当代の都市人を批判している。

「小生は嘗て、某公爵が郊外大庭園（実は森林）を提出して宅地に提供するといふ計劃を聞いて、その今様かぶれの思想であつて、不見識の甚だしきものであることを友人と語り合つたことがある。市街地に必要なものは先づ以て自然物である。住宅不足の如きは交通機関の延長によつて、之を遠い郊外に求め得るのである。」

このように言つて、赤彦は、今次の震災を今後の教訓とすべきことを説く。

「もし、人類が、今回の如き災害によつて、幾分にも自然の威力と尊貴とを覚り、自己の生活を謙遜にし、質素にすることを知つて来たならば、それは、災害から生れた新しき幸福であつて、その幸福は災害の失ふ所よりも更に大きく貴いものである。待合や旗亭入り浸りの文士や、ダンス芝居有頂天の淑女らも少しこの辺で考へていい。」（九月三十日）

「目に見るもの」に続いて、十一月号の「震災号」に執筆した「震災雑感」でも、赤彦は同様な論を展開している。

「今回の震災は、東京の人々を、根底から赤裸々にして、自然の前に立たせたのであつて、人間のつくり上げた文化が、自然の前にどれだけの力を持つてゐるかといふことを、有りのままに人類の面前に示したのである。地上に人間のあることは、大自然の現れの一様式である。自然の一様式である人間が、自然に対して無関心であり、或は自然の前に尊大であり、有頂天であるといふことは、それが如何なる文化から生れ来れる現象であつても、左様な現象を胚胎する文化の基礎に歪みがあるのである。歪んだ上に建てられた堂塔が、一朝にして崩壊すれば、残るものは赤裸々な人間の蠢動だけである。」

「現代人の根底から悟るべき時が来たのである。自然を尊び、自然に親しんで、その前に従順であり謙遜であることは、小生等の常に念じてゐることであつて、未だ嘗て徹し得ない所である。現代歌人往々にして斯様な儕の念ずる所を以て、現代離れのした老人の骨董いぢりに比せんとする。紅緑燈裡不夜街上の夢さめて、猶この言をなすならば、遂に歌人の群れの崩壊である。」

赤彦はさらに言う。

「小生は毎月東京に入る度に感ずる。東京には第一に新鮮な日光がない。（中略）第二に新鮮な空氣がなく、第三に新鮮な土がなく、第四に清冽な水がない。日と空氣と土と水の四大から隔てられつつある東京人が、自然との隔離を無関心にして人工的快樂を追求し、その獲得場裡に泣いたり笑つたりすることに血眼になつてゐる時に地震が揺れ出したのである。現代人の覚るべき時が、千載に一度来たのである。」

これは前者より短文ではあるが、論旨はいっそう徹底している。「地上に人間のあることは大自然の現れの一様式である。」と言

い切っているのは、人間存在の根源についての認識が、一段と大自然との一元化の方向へと進んだことをあらわすものである。「現代人の覚るべき時が、千載に一度来たのである。」と述べているのも、赤彦が震災の発生にいかに関撃を受け、深刻に受け止めたかを示す注目すべき言葉である。

このような認識に立って赤彦は新東京の建設についても提言する。

「新東京の建築には、工業区域でも商業区域でも、家の四周に必ず樹木を立てさせるやうに定めたい。家と家との間に餘地が出来、下に草が伸び、上に枝葉が茂る。落葉が街上の風にころがり、木の果が暖簾の外に落ちる。東京の人々は斯る中で幼少から自然の手に育てられることが出来やう。街上に電線の網が無くなり、地下に電車の音が隠れば、都会はここに文化地としての端正な品格が保てる。各地に大小の公園をつくり、その中に建物を少なくして草木を茂らせれば鳥類虫類が自由にそこに棲息する。東京は武蔵野のつづきであるから、鳥類が多い。鳥獣虫魚を一層多く招来することは新東京のために必要である。自然物に親しんで、自然の恩恵から離れぬやうにすることは、平生の生活にあつて必要である。火災や地震のためにのみ言ふのではない。」

このように積極的に発言しているのは、この時期になると、一時は打ちのめされたかに見えた国民が、早くも立ち直りを見せ、社会の関心も帝都の復興問題へと移ってきていたことを反映しているのであらう。

「目に見るもの」において、今回の震災の教訓を生かし得るならば、それは「災害から生れた新しき幸福」であると言っていた赤彦は、この「震災雑感」においても、「どん底の境遇にあつて、はじめて人間本来の力が出る。その力は美しく、悲しく、而も偉大であ

る。都人の生活が質素になつたといふことも、自然から歩み出さうとする発憤の現れであつて、どん底の境遇から生れた有難い経験である。これを永久に忘れぬやうにすることは人間の真の幸福になるであらう。」と書いている。これは地震による災禍を、「想像以上の天災也」（九月七日付中村憲吉宛書簡）と表現し、アララギの同人、会員及び関係者の生命に別条のなかったことを「天佑」（震災報告）と書いた心情と相通するものと言えよう。

このような受け止め方は、赤彦が当時震災を天譴と見做した少なからぬ数の知識人と共通の思想の基盤の上に立っていたことを証するものである。

たとえば『アララギ』の「震災号」に「大震災の後に」と題する文章を寄稿した西田幾多郎も、震災についての感想を次のように書いている。

「今度の大地震に逢ひて、我々日本人は反省せなければならぬ多くのものを得たと思ふ。一には誠実といふことが足らなかつた。煉瓦の建物であつても、少しも手を抜かないで、誠実に手堅く出来てゐたものは損害が少なかつたさうである。二には有機的統一といふ考へに乏しかつたといふことである。一方に堅固な建築をしても、すぐその隣に潰れて火の出る様なものがあれば、何の役にも立たない。水道があつても、それがすぐ破壊されてしまふ様では、何の頼りにもならない。三に最も大なる缺點は、深く考へて大なる計画を立てるといふことがなかつた、何事もその日ぐらしである。」

西田はこのように現代の日本文化の浅薄さを指摘して、「それから私はかかる機会に於て、人心がもう少し自然といふものを愛好する様になつたらと思ふ。自然と文化とは相反するものでない、自然は文化の根である。深い大きな自然を離れた人為的文化は頽廢に終

るの外はない。大きな一枚の大理石から彫み出された様な文化であつてほしい。我々はいつも眼の前にちろつく人為的文化にのみ憧れる必要はない、深く己の奥底に還つてそこから生きて出ればよい。」と文化の根源は自然であることを強調し、自然に親しむ必要を説いている。

大正十二年の十月号を「大震災号」として特輯を組んだ雑誌『改造』の寄稿者の中にも、何人もの論者が、現代の日本乃至日本人を批判し、その反省を求めようとする意見を表白している。「天災に非ず天譴と思へ」と題する文章で、近松秋江は、「実のところ三三十年代の日本国民はその国民的成功に酔つてゐた。殊に欧州大戦の餘沢に浴してアメリカに次ぐ成金国となつてからは心ある者には苦しいまでに好い氣の骨頂になつてゐたものである。」と書いてゐるし、小川未明も、「模範的文明の破壊」と題して、「人間はあまりに自然を無視し過ぎたのである。人類の歴史が半分は自然との闘ひであつたことを忘れてゐた。たとへば、安政の震災を経て、まだ幾何ならざるに、その災禍については、殆ど忘れたものゝ如く、災害の稀な海外の文明をその俤、我が国に移動せんとしたことについても分るのである。(中略)これを精神方面より見るも、あまりに、利己的であり、物質的であつた。本来理想的であり、想像的であつた東洋固有の特質は、いつの間にか、現世的となり、現実的になつたことを、彼等は、寧ろ誇りとするまでに、西洋の思想に化せられたのであつた。」と論じて、明治以来の日本人が東洋の伝統文化の特質を忘れて西洋文明一辺倒へと傾斜してきたことを批判している。永井荷風は『断腸亭日乗』に「近年世間一般奢侈驕慢、貪欲飽くことを知らざりし有様を顧れば、この度の災禍は実に天罰なりといふべし。何ぞ深く悲しむに及ばむや。民は家を失ひ国帑また空

しからむとす。外觀をのみ修飾して百年の計をなさざる国家の末路は即ちかくの如し。自業自得天罰觀面といふべきのみ。」と書き付けたが、震災に際してこれに近い感想を抱いた者は作家、言論人の中にも相当にいたのである。

一方、むしろ天譴説を退ける者もあり、『改造』の「大震災号」においても、たとえば芥川龍之介は、「地震に際せる感想」を寄稿して、「この大震を天譴と思へとは浪沢子爵の云ふところなり。誰か自ら省れば脚に疵なきものあらんや。脚に疵あるは天譴を蒙る所以、或は天譴を蒙れりと思ひ得る所以なるべし。されど我は妻子を殺し、彼は家すら焼かれざるを見れば、誰か又天譴の不公平なるに驚かざらんや。不公平なる天譴を信ずるは天譴を信ぜざるに若かざるべし。」と浪沢栄一が震災天譴説を唱えたのをきびしく批判し、「同胞よ。冷淡なる自然の前に、アダム以来の人間を樹立せよ。否定的精神の奴隸たること勿れ。」と呼びかけてゐるし、菊池寛も「災後雑感」で、「自然の大きい破壊の力を見た。自然が人間に少しでも、好意を持つてゐると云ふやうな考へ方が、ウソだと云ふことを、つくづく知つた。宇宙に人間以上の存在物があり、それが人間を保護してゐるとか、叱咤すると云ふ信仰もみんな出鱈目であることを知つた。もし、地震が浪沢栄一氏の云ふ如く天譴だと云ふのなら、やられてもいゝ人間が、いくらでも生き延びてゐるではないか。浪沢さんなども、自分で反省したら、自分の生き残つてゐることを考へて、天譴だなどゝは思へないだらう。」と論じて、「自然の前には、悪人も善人もない、たゞ目茶苦茶だ。今更人間の無力を感じて茫然たる外はない。いろ／＼口実を付けて、自然の暴力を認めまいとするのは、人間の負け惜しみに過ぎない。」といふにも菊池らしい意見を吐いている。

震災天譴説に通ずる自然への親近の重要と東洋文明の伝統の尊重の主張とが、赤彦において著しく強く前面に現れてきたのは、ここ一、二年のことである。

たとえば赤彦は、大正十一年の『アララギ』の一月号の巻頭に『往生要集』の一節を掲げたが、同年二月号には『一遍上人語録』から、三月号には佐渡民謡からというように、以後続けて東洋の古典や古人の言葉あるいは民謡などの一節を録して巻頭に掲載している。大正十二年の一月号に掲載したのは芭蕉の言葉であるが、その裏面には、ドイツ在留中の某氏からの次の書簡を録している。

「〔前略〕嘗て先書申上げ候如く、小生は外国に参りて、始めて、真に日本文化の誇るべき特色（と申さんよりそれ程外的ならぬ）日本民族の性格、生活基調の真に尊むべきものあるを衷心より感じ候ことに御座候。自我肯定の西洋文明は、今日の如く物質的生活の困窮に陥りても、猶反省する所以を知らず。如何に無理をしても、自我の欲望を満足すべき手段を争ひ求めんとして、真の救済は却て自我の否定にあり、精神を以て物質に打克つに存することを覚らざることに、寧ろ痛ましく感ぜられ候。之に対する東洋、或は日本の文化乃至生活の基調が自己否定、自己犠牲、諦め、運命に黙従して、却て之に打克つ自由の境地を発見せんとするは、実に正反対の対照に有之、到底西人の理解する能はざる境地と存じ候。西洋の叙情詩が感傷の甘さに堕せんとするもの多きも、矢張その一つの現れかと被存候。（後略）——独逸在留某氏書信より」

この某氏というのは、哲学者の田辺元である。元は先に赤彦が歌集『氷魚』を上梓した際に『アララギ』に「『氷魚』を読む」と題する一文を寄せて、その歌に高い評価を与えていた。以来赤彦はその意見を格別に重視していたのである。元の書簡を掲載したのは、

むろん、そこに記された元の西洋文明に対する批判が、自分の意を強くするものであったからにはかならない。

東洋伝統の文化の尊重を赤彦がこの頃強く主張するようになったについては、第一次世界大戦後における西洋社会の混乱や、日本が戦勝国の一員となったことが関わっているであろう。斎藤茂吉が大正十年十月に渡欧してからの後の赤彦は、百穂の協力のもとに、自分を中心とする結社の運営体制を固めた。このような状況の変化の中で、赤彦本来の傾向が表に色濃く現れるようになってきたのである。

震災から受けた衝撃はやがて、「九月一日を毎年日本人の玄米を食べる日にしたいといふ人がある（5）」。小生はそれに賛成して実行するつもりである。（「信濃便り」『アララギ』大正一二・一二）というような実践的な行為として赤彦に現れてくる。赤彦が歌道の修行の場としてアララギ安居会を開くのは大正十三年の夏であるが、ここから安居会の開催までの距離はただ一歩があるだけであろう。

赤彦は右に続いて、震災後に起こった次のような奇跡的な現象についても記録しているが、こうした記録をとどめたのも、東洋の伝統的精神文化への傾斜を示すものといえよう。

「築地の聖路加病院で九月一日に胃の切開をした人が、火災を裏の溝川に避けて一夜を過した。其の人が完全に治癒したとのことである。信州小諸在の人は腰の立たぬ病気で順天堂病院に入院してゐたが、地震の騒ぎで腰が立つて立派に歩行出来るやうになつたさうである。現に岡さんは地震前慢性の病気で居られたのが地震後立派に健康になり、重荷を背負つて小石川林町から代々木まで歩かれた事もあり、今も其の状態を保たれてゐる。高田君は隅田川でうけた火傷が背中から腿へかけて一面に點點としてゐたのが、少しの痛む



事なしに自然に癒つてゐる。火傷と言うても中には指頭の入るほどの深傷もあつたのである。多くの人の語る所によれば地震に遭へる総ての神経衰弱症者は皆自然に癒つてしまつた様である。斯ういふ事実は有るがままに記録して遺し置いた方が後人の参考になるのである。」

自然への親近と東洋の伝統の尊重を説く赤彦の内にあつたのは、自己の再生への希求であつた。赤彦は、震災に追われて逃げまどう群衆の中で子供を連れた婦人が多く命を落としたことを聞いて、「目に見るもの」において、「痛しく美しい死」と讃美する一方で、「男女平等が履き違へをして、男のする事に女が手を出す。」ことや、「社会的事業など言うて狂奔する女」について、「家にあつて哺育を専らにすることが出来ぬ。母子の情は自ら濃厚にあり得ない。」として、「これは世界各国の等しく罹つてゐる文明病の一である。」と批判している。また、「震災報告」では、有島武郎がこの大正十二年六月に軽井沢の別荘において『婦人公論』の記者で、人妻の波多野秋子と情死した事件に触れて、「糜爛せる東京の文化は有島氏あたりを期として打切り、新たな芽の張り出づべきを信じ申し候。」と書いている。この年、巷には野口雨情作詞、中山晋平作曲の「船頭小唄」が流行していた。幸田露伴はこの現象を「震は亨る」と題する一文において震災と関連させて論じているが、赤彦もまた、このような世相を頹廢的なものとして激しく嫌悪し、日本人が本来あるべき姿に復帰することを強く願つた。それは自分自身にとつても再生への道であることを、赤彦は震災の衝撃によって明確に自覚したのである。

## 六

震災詠が発表されたのは大正十三年に入ってからのことである。

「震災歌号」として発行した同年二月号の『アララギ』に、十七首の歌を発表、次いで三月号に四首の歌を、さらに十一月号に「震災補遺」として三首の作を発表している。

後にこれらあわせて二十四首の歌は、詞書と歌句とにいくらか推敲の手が加えられ、整えられて、「関東震災」の題のもとに大正十三年十一月に発行された第四歌集の『太虚集』に収録された。

九月三日信濃を發し五日東京に着く。六日下町中心地を訪ふ

遠近の烟に空や濁るらし五日を経つたは燃ゆるもの

灰原をふみつつ人の群れゆけり生きたるものも生けりともなくだにも道べにこやる亡きがらを取りて歎かむ人の子もなし

日本橋下猶屍を収めず

濠川に火を逃れむと思はねどすべなかりけむあはれ人々

老母を車にのせてひく人の生きの力も尽きはてて見ゆ

大宮の芝生に群れて人臥れりこの世はいかになりはてぬらむ

大君の御濠に下りて衣すすぐ己が身すらを夢と思はむ

埃づく芝生のうへにあはれなり日に照らされて人の眠れる

山の手

月よみののぼるを見れば家むらは焼けのこりつつともる灯もなし

本所相生警察署長が群衆に向ひて被服廠跡に遁れよと言ひしは  
当時において已むを得ざるに出でたるべし。責を感じたる心中  
推測に堪へず

ひろ庭に人を死なせむと思はめや己れを悔ひて命断ちつる

『太虚集』の中から引いたこれらの歌は、九月六日に藤沢古実を伴って東京の下町方面を巡った際、目にした光景を詠んだものである。悲惨な現実を目のあたりにして受けた強い衝撃を心中に保持し、高い格調をもって詠出している。

「大宮の芝生」は、皇居前の広場、「大君の御濠」は皇居の堀である。これらの歌に詠まれたような光景を何人かが写した写真が遺されており、これが当日の実景を詠んだものであることが知られる。「関東震災」の連作の中には高田浪吉一家の悲運を詠んだものと被服廠跡の惨状を実地に見て作した歌も含まれている。

高田浪吉隅田川に浸りて纔かに難を免る。母と妹三人遂に行方を失ふ

現し世ははかなきものか燃ゆる火の火なかにありて相見けりちふ

火のなかに母と妹を失ひてありけむものかその火の中に己れさへ術なきものを火の中に母と妹をおきて思ひしあな悲し火に焼かれたる人の背に葉ぬりつつわれは思ふも

本所被服廠跡に来る。散乱の状甚し

生きの世のうつし心も我はなし骨さへ土の上に積まれし

ありし日の老若男女あなはれ分ちも知らになりけるかな

高田浪吉一家の仮小屋成る

きのふ今日仮家のうちに住みつきて寂しくあらむ亡き人のかずただ一つ焼けのこりたるものをもちて仏刻むと聞くが悲しさ

終わりの二首は、仮小屋ながら浪吉の一家に住居が建築されたのを喜びながら、母と三人の妹とがすでに現世におらず悲しみを新たにする浪吉一家の心情に同情を寄せた歌である。

「ただ一つ焼けのこりたるもの」というのは、高田家の風呂の栓木である。火災が鎮まり火熱が収まった後、家人が焼跡を片付けていると、焼け落ちた家屋の灰の中から風呂の栓木が出て来たのである。

浪吉の父は、この栓木に四体の仏像を刻んで、無惨な運命に遇つて命を失った妻と三人の娘の追善供養を営んだ。そのことを歌ったのである。

赤彦は浪吉の父の依頼を受けて「仏像由来」を書いて与えた。

大正十二年九月一日京浜大震災ノ際我が家ハ本所区番場町九番地ニアリ。午後三時火ニ囲マレ家族十人四散逃奔ス。妻とく(四十八歳)次女よね(二十一歳)三女こう(十九歳)五女八重子(九歳)遂ニ行方ヲ失フ。江東江西一望荒寥スベテ灰燼ニ帰ス。我家亦災ヲ免レズ。遺ルモノ僅ニ浴槽ノ栓木深ク灰底ニ没スルモノアリ。即チ之ヲ以テ仏軀四體ヲ刻ミ追善菩提ノ因トス。偏ニ子々孫々ノ回向ニナサシメンガタメナリ。

大正十三年七月六日 高田滝三 島木赤彦誌

赤彦は、「震災歌号」として発表された『アララギ』の大正十三年二月号の「編輯便」で、「本号を震災歌号としたのは時期猶早過ぎた感がある。あれほどの変事に対して、製作の衝動を最後まで貫徹せしむるには、今少し時間を要するであらう。只本号に集まったものが如何にも力作揃ひであることを喜ぶ。これを見ても震災が吾

儕に与へた幸の大なることを窺ひ得る心地がする。」と書いてある。事實、この号だけでなく他の号に発表された歌にも多くの秀歌が見られた。

赤彦はそこで、これらの震災詠の中から秀歌を精選して歌集を編輯することを思い立ち、中村憲吉その他の同意を求めた。その計画を『アララギ』三月号の「編輯便」で、「アララギ二月震災歌号につき感慨の手紙多く戴き喜ばしく存じ候。大異変に対して歌人として努力すべき幾分を尽したる感有之、中に永久の記念とするに足るもの有之と存じ候。就ては、これを大正十二年歌集として特別に刊行する事に定め候。十一月号以降今日に至るまで可なり多数有之、三月号以後も猶現れ申すべけれど、先づ以て三月号までを一切とし、そのうちより精選して出版仕るべく、已に古今書院の賛成を得、四月上旬発行の事に定め申候。」と会員に報知している。「斯様のものの日本の一隅に存在して宜しきかと存じ候。天変地変に直面してよみし歌は古来少なきやうに候、万葉にも殆ど見当らず、それ以後も同様ならんと存じ候。右様の點よりこの一卷は歌集として類少なきものと存じ候。」とこの歌集の出版が意義のある企てであることを力説している。

選者に岡麓と中村憲吉を委嘱し、早速に編輯の仕事に掛かった。作業は順調に進み、四月号の「編輯便」では、早くも「震災歌集は灰燼集と改名した。内容は変わらない。数日中に印刷にまはる。」と進捗状況を報告するまでになり、大正十三年五月末に、アララギ叢書第十七編『大正十二年歌集 灰燼集』として出版された。

赤彦の震災詠は、満洲詠と共に、前述のように、大正十三年十一月刊行の『太虚集』に収録されたが、この歌集はもと大正十二年十一月に刊行を予定していたものである。それが震災と、満洲旅行、

養父の病氣などが重なって、刊行が遅延したのである。『太虚集』はこのため「関東震災」「満洲」などの作を含む見られるとき歌集となったのである。因みに『太虚集』という歌集名は、藤沢古実の記述（『太虚集の展望』、『赤彦遺言』昭和四・六 鉄塔書院）によれば、『アララギ』の大正十年十月号に発表された「寂しめる下心さへおのづから虚しくなりて明し暮らしつ」の作に由来するというが、歌集名が決まったのは、満洲旅行の後のことであり、震災と満洲旅行の体験がそれに関係しているものと考えられる。

震災に遭って衝撃を受けた赤彦は、『太虚集』の「巻末記」に震災当時を振り返って、「大正十二年九月一日の関東震災は、今更に架説しようと思はない。自然の威力と言うても、あゝなれば暴力である。暴力であつても、それが自然の不可抗力である以上何うすることも出来ないのである。自然に対する人間の力のどん底を、あの震災でまざく目の前に見せつけられた心地がし、小生等のもつ人生観も、あゝいふ現象に対して、新に根底から揺り醒まされる心地がする。幸にしてアララギ同人悉く難中に命を全うしたのは真に天の佑けである。」と書いてある。震災の前には殆ど神経衰弱に陥っていた赤彦は、このような衝撃によって氣力を取り戻した。さらに満洲旅行において日露戦争の戦跡を巡り、異国の風土に触れて、改めて勇氣を奮い起こした。本土に帰着したあと、車中から高田浪吉に宛てた葉書に、「小生元氣益盛なり満洲行は実によかった」と書き、十一月四日付で大連の池内忠義に宛てた葉書にも「小生も新しき境土で得た生命の新鮮さを持して益々勉強するつもりです」と記している。

赤彦は満洲からの帰路乗船した汽船が下関港で下船したあと、瀬

戸内海で衝突事故を起こし、危く災難を避け得たことも深く心にとめた。<sup>(8)</sup>

赤彦は大正十二年の暮れに、平福百穂に宛てて、十八日に長子の政彦の七回忌を済ませた後上京する予定であることを知らせ、「あの時茂吉ハ長崎へ行き申し候漱石先生の逝きしもあの年の三四月頃に候何事も夢の如く過ぐる事を思へば少し勉強せねば済まぬ心起り候小生ももう四十九歳ならんとし餘生幾何もなし十年勉強出来るや否やも分り申さず候」(大正一二・一二・一六付書簡)と書いている。晩年の赤彦について中村憲吉は、『アララギ』の「島木赤彦追悼号」(大正一五・一〇)において、「兎に角赤彦君の一二年來の素振りは、何だか日暮れの道を急ぐ人のやうで、まだまだ赤彦君の体力を信じてゐた私には、心配をしながらも寧ろ不審な位に思はれてゐたのである。」「(赤彦君を悲しむ)」と回想したが、赤彦の変貌は、この辺りを境として親友の目にも著しいものに見えたのである。

震災は出版界に回復不能を思わせるまでのダメージを与え、菊池寛のごとく出版界の凋落を予想する者もいた。多くの出版元が焼け、小売の店も八分は焼けた。博文館印刷所や秀英社印刷所など大手の印刷所も焼亡した地域にあつたので、大方の見るところも菊池と殆ど同様であつたろう。しかし、現実には反対の方向に動き、震災後の出版界は活況を呈した。このような状況の中で『アララギ』の出版部数も大きく伸びた。大正十二年十一月二十七日付の斎藤茂吉宛の書簡で、赤彦は「アララギは地震後二百増して二千部にしたどうも変だが増えるのは悪くはないと思つてゐる」と増刷のことを報じている。十二月十三日にもそのことを繰り返した後、「決シテ売レサウナリナド有頂天ニハナラズコレ以上早速ハ増サセヌツモリ今半年モ様子ヲ見ント思フ」と書いているが、その後も部数は伸び、十三

年一月一日にも茂吉に宛てて、「アララギも正月より二千部発行する御欣びを乞ふ地震後ズンズン殖える(地震前は千八百なり)只いい気にならぬゆゑ御安心願ふ」と最近の様子を知らせている。震災によって書物を焼失した人々は、活字に飢えていたのである。『アララギ』の部数が伸びたのは、もちろん、赤彦の努力に負うところも少なくないことは言うまでもない。

社会の各方面に甚大な影響を及ぼした関東震災は、上述のようにして、赤彦に対しても強烈で深刻な影響を与えた。赤彦の最晩年の境地は、この震災を契機として開かれたのである。

## 注

(1) 赤彦の当時の心情は、ドイツ留学中の斎藤茂吉に宛てた次の書簡によつても窺われるであらう。「画伯よりも中村(?)よりも色々知せて下つたと思ふその事小生より申上る苦なれど億劫になつてしまつた大体は御承知になつたと思ふしどうも巨細は厄介ゆゑ申上げぬ要するに古泉も自然アララギ同人から離れるに至るならん歌界の人々はよくアララギが古泉をいぢめると申す由アララギも小生も未だ一度もいぢめたることなしこちらが始終苦しめられてゐる也それもズベラとかのんきとかの事ならよしとても人間として忍び得ぬことを平気で忍んでゐる(?) 事實は君の帰朝後をまつ此の間中村上京野田大塊の息子と飲みしに橋田東声氏子規全集を出さんと正岡氏を訪ねしに子規のものを出して下さる人多けれど近ごろ印税も来ずたとへば子規短歌全集も一月出でし事なれど編者より何の挨拶もなしと話されし由それを野田氏が中村に話したるよしこれは貴兄が連帯の事ゆゑ岡さんに願ひ岡さん正岡家を二度訪問して貴兄の立

場を諒解してもらひ印税約五百円の半分だけ届けることにせりこれは輝子さんより貴兄代理として行つて頂く方がよしと存じ左様願ひ置けりこの事につき画伯も非常に心配して下され岡さん同伴にて高浜氏をも訪ねて了解を得たる由御知らせあり恐縮の至也これはほんの一例也貴兄連帯の事ゆゑ手を出したれど古泉一人の事は到底手が出ない先月もアラガギを決して離れぬと態々申来り「詩と音楽」へ歌多く出せし上はアラガギへも出さねば世間に変ゆゑ歌を送ると言ひそれも送らず外界の交通は彌繁くしてアラガギとは自然疎くなる也小生もいゝ顔してゐれば腹に不快にて表にいゝ顔も出来ず自然疎外になる事已むを得ず画伯も中村も彼が刑事問題を惹起せねばいゝがと言ふ事こゝに至るも小生等が責任を以て彼を保証する事は出来ぬと思ふどうも直接衝に当るのは発行所になるこれは御承知置きを願ふ／アラガギ土田弱くて困る今飯山にある今月号の如きは小生一人で書いてゐるやうなもの也実に困る君の言ふ通り私信は出さぬが出していゝもの少し送られぬ一枚のハガキと雖も非常に有難いそれは君に分ると思ふ（中略）岡さんは糖尿病なり長い事と思ふ従つて原稿をあまり催促出来ぬ実に悲しい四苦八苦の態なり釈氏もアララギより離れ古泉も殆ど然り土屋君も一向寄り付かずこれ小生の罪ならんその愚痴を君に申上るなり」（大正十二年八月十一日付）

(2) 平福百穂は、帰郷した赤彦に宛てて九月二十四日付で書簡を送り、自分の発言の真意を、「先日は態々御上京まことにありがたく存候。その節愚見申上候事少々過ぎたこととにて悔ひ申候。来月ハ倍大の必要も無く是迄通のもの出来さへすれば極上上のことと存候。ただ少しでも早く出すこと第一と存候。人の噂によれば、大ていの雑誌は十二月号は休刊ならむとの事ニ候。併しアララギハ十二月でも休みたくなきものに候。」と記している。

(3) 改造社は大正十二年十月号の『改造』を「大震災号」として特輯、諸家の稿を掲載した。巻頭に掲げた「大困難に当面して」と題する文章では次のように論じている。「我が国人は永遠に大創見の域に

達せず、永久に模倣者として第二義的人種たるべく想像された。しかし今回の大困難に遭逢した人々は百年の精神的鍛錬を飛躍して更に深刻なる創見を迫られたのだ。我有史以来かほどまでに崇高の念を味ひ得たことはなく、かほどまで最深の人間味に泣いたこともなく、そしてかほどまで協力、互助の精神を味得たこともあるまい。災厄の為に家産を傾け、妻を失ひ、児を失ひ、或は一家全滅し、類族全滅し、帝都を全滅し、沈痛なる悲劇は彼処にも此処にも起つた。この莊嚴なる出来事によつて人力の総和力も自然の威力に対して遙かに遜色あるを示した。しかく我々はこの悲壮なる災厄に逢て人力の対抗力の度を知り、人智の自然を征する深刻なる力が未だ韜されて綽々たる別天地あるをも知った。我々は涙ぐましいほど深刻になつた。恐ろしいほど、底気味悪いほどの光景を仰いで徹底せる人生觀に達着したのだ。だが、自然が人類の殺いだ所に人間としての深みは湛えられ、大自然の威力に震慄して頭も上げ得ぬ裡に、鬼神も三者を避くる勇猛心が培はれた。そして大自然に反逆し、大自然を征服する堅牢なる鉄意志が完成したのである。」

(4) 北原白秋も小田原山荘での生活を題材とした『風蔭集』（昭和一九・三 墨田書房）の中で、たとえば、次のように詠んでいる。白秋は小田原で震災に遭つたのである。

天意下る

世を挙げて心傲ると歳久しく天地譴怒いただきにけり  
この大地震避くる術なしひれ伏して揺りのままに任せてぞ居る  
言挙げて世を警むる国つ聖いま頭れよ天譴下りぬ

国民のこのまがつびは日の本し下志れたる心ゆれ来れり  
大正十二年九月ついたり国ごと地震亨れりと後世警め

(5) 「目に見るもの」の中で、赤彦は「六日に岡氏が徳川家へ見舞に上がったとき、徳川主公は玄米飯を食べて居られたさうである。有りがたい現象である。」と書いている。九月一日を玄米を食べる日にしたいと言つたのは岡麓でもあつたであらうか。

(6) 赤彦はこの文章に続けて、秀歌の例を挙げている。

「一寸記憶に上つてゐるものだけでも、岡麓の

地震ふりしあとかたもなし風向きに青草波は露をこぼせり

辻村直の

我知れる人の御骨もあるならむ回向しをへて思ひ沈みぬ

の如きは、震災の生んだ尊い産物であらうと思ふ。二首挙げたのは、之が他のすべてに傑れてゐるいふのではない。諸氏の熟読を冀ふ。」

(7) 「灰燼集」巻末小言」では、次のように書き、この歌集出版の

有意義なることを自負している。「昨年九月一日の地震は、災禍が

日本に未曾有であり、世界に於ても未曾有である。西は沼津から東は千葉に及び、遠く信濃の山国に潰れ家数戸あつたのを見ても、範圍の広範であつたことが分り、東京の過半と横浜の全部が壊れて焼けたので、災禍を極端に至らしめた。それほど天変地異に遭遇した大正の歌人に多くの歌のあつたのは当然であるが、これは明治以後の歌が、古今集以来の題詠を離れて日常の生活に直面することを知つた賜ものであるとも言へる。仮に古今風新古今風の読みぶりを以て、あの惨禍に向つたらどうであらう。型に嵌めるには破天荒に過ぎ、感傷に甘えるには痛烈に過ぎる。高山の頂上や大海のただ中に立つて、よい歌の生まれることの少いのは、歌人の力が足らなくて、自然を捉へる前に、自然から圧倒されてしまふのであらうと思はれる。況して、今回の震災の如き異常なる地変に對して、その感銘を捉へ得るのは、非常なる多力者に須たねばならない。浅くして妥協し、軽くして喧噪に終るやうな作品の多いことは、大正歌人の誇りにはならない。この點に於て、震災当時忽然として現れた多くの歌が、どれほどの力をもつてゐるか知らないのである。本集の作者、亦、自らを多力者として自ら居るものではない。殊に当時感銘の深所に入つて、遂に茫然自失せんとした心を回想して、その前に自己の作品を置いて、得意にならうとは思ひかけぬのである。只本集の歌をなすためには、少くも三四箇月の苦心を累ねて居り、数に

於ても、選ぶが上に更に更に厳選してゐる。これを震災記念の一端に置かうと思ふに過ぎぬのである。」

(8) 赤彦は大正十二年十一月十四日付の中村憲吉宛の書簡に、「台南

丸はあの夜瀬戸内で正面衝突せしよし小生は幸運なりき」と書いている。久保田夏樹『赤彦病床記』(昭和二三・三 沙羅書房)によれば、赤彦は、最後の病床にあつた大正十五年三月十七日の午後八時に枕頭に侍していた家族に向かって「朝起きたら、お前がたは上社と下社(諏訪明神)の方へ向いて拜んでお呉れよ。おれはお明神様から大変助けられてゐるで。大連から無事で帰つたこともな……。十六の時に願がけましたし……。」と言つたという。この赤彦の言葉は、夏樹氏の「註」によれば、「大正十二年十月満洲旅行の帰途、便乗すべく豫定してゐた船に乗らなかつた。其の船は途中沈没し、厄を免れたのである。」ということであるが、氏の記述は、右の憲吉宛の書簡と矛盾するので、おそらく誤りであらう。しかし、氏の記録は、満洲への旅から無事に帰国できたことを赤彦が、諏訪明神の加護による己の運命として、生を終える最後のときまで、深く心のうちにとどめていたことを証するものであり、記憶にとどめておくべきであらう。